

ワンツーワークス・ワークショップ#7

「喋る身体・聞く身体」 —会話術のスキルアップ—

講師/古城十忍・奥村洋治 インストラクター/関谷美香子・山下夕佳・越智哲也
アシスタント・記録/増田和・原田佳世子・日暮一成

日時/2013年11月22日(金) 18時~21時30分
23日(土) 13時30分~20時30分

会場/芸能花伝舎S3

参加者/8名(女性6名・男性2名)

記録・レポート/山下夕佳

〈一日目〉

ウォームアップ

- 腕のストレッチ
- 胸のストレッチ
- 股関節のストレッチ
- 足のストレッチ
- 全身をほぐす

まずは体を伸ばす。左右の腕を上下に突っ張り、両手の先が一直線になるように。時計の針が6時を指すように。背骨もまっすぐに。同じように両手を真横に突っ張る。時計の針は9時15分。手首を立てて両腕を外回し、うち回し。胸を斜め上に引っ張る。背を丸めて後ろに引っ張る。腰を前に出す。後ろに引く。「上半身は固定してください。膝は緩めていいですよ」などと声掛け。

秋口は演劇公演が大変多い季節ではあるが、そのせいかどうか、今回の参加者は定員を大きく割って、8名の少人数となった。しかし、これもまた濃密で良い。劇団員と参加者がきっちりマンツーマンでペアが組める。

劇団員と二人組でペアになり、体側・下半身のストレッチ。床に座って両足を広げて上半身を横に倒す。左右ともに体側を伸ばしたら前に倒す。あちこちの劇団員から「おお〜！」と歓声上がる。今回参加の皆さんは大変体が柔らかい。ほとんど全員が足はほぼ真横に、体は床にべったりとついてしまう。補助でペアになっている劇団員たちはほとんどやることなくらいだ。

仰向けに寝て、足を体に引き寄せる。縦に横に。開脚・閉脚。これも問題なし。皆さんよく足が広がること。……と、たった二人の男性参加者の顔が苦痛に歪んでいる。ペアを組んでいる奥村の声援。「頑張れ〜！辛抱だ。変なかたちになってるぞ〜ワハハ！」女性が柔らかい分？二人の男性は人並み外れて硬いようであった。普通に座る——長座も大変そう。腰が落ちて背中が支えられない。ちょっと安心(笑)

安心したのも束の間、古城から「はい、交替」の声。げっ！参加者が少ないってこういうコト？ワンツーワークスの軟体人間はわずか二名……関谷と越智だけである。とくにアラ 50 の二名（奥村とワタクシ）なんて、日頃の不摂生もたたって体ガチガチである。若い日暮は昔から、石でできているような体だ。「ギョエ〜〜！壊れる！」「痛い痛い痛い！」「ストレッチのためのストレッチが必要なんだよう……」。まったく情けない限りだ。見本となるはずが、とんだ醜態を晒すハメに。「日頃伸ばしておりません」と身体が喋る喋る。トホホ。



発声

■脱力ジャンプ

■一行交替発声

■一音連続発声/二人一組・三人一組

■三音連続発声/三人一組

各自軽くジャンプ。肩の力を抜いて、膝も柔らかく。着地と同時に声を出す。言葉は「アエイウエオアオ」で。重力に素直に発声すること。（脱力ジャンプ）

鏡に向かってあぐらをかき、端から順番に「アエイウエオアオ」。腹式をきちんと使って一語一語アタックを強く、切るように。

に。一人が言ったら全員が復唱する。（一行交替）

再び劇団員と二人組になって、一人一音ずつ交代で発声する。「ア」「エ」「イ」「ウ」……という具合に。だんだん早く、滑らかに。三人組になって同じことを。三人になると規則性がなくなるので格段に難しくなる。二人になっても三人になっても一行が連続して聞こえるように。（一音連続）

今度は一人が三音ずつ言う。「アエイ」「ウエオ」「アオカ」「ケキク」「ケコカ」「コサセ」……という具合に。これも最後の鼻濁音まで滑らかに連続して聞こえるように。（三音連続）

重心

全体をファーストとセカンドに分ける。ファーストとセカンドがお互いに体や声の変化をチェックし合う。

「ファースト、前に出て。スキップで『あめんぼ』と古城の指示。笑顔でスキップをしながら『あめんぼのうた』を繰り返す。「もっと高い重心で！幸せで幸せで仕方がないよー！もっと幸せになって重心上げて」「そのままストップ。その場で同じ状態で、高い重心のまま『あめんぼ』。体が止まると重心も下り始めるのがわかる。意識を胸、顔、頭のとっぺんなどに集中させて高い重心をキープ。

■重心の変化 高い重心/スキップと静止

■重心の変化 低い重心/静止

■『あめんぼのうた』を使っての会話
—高・中・低い重心—

「スキップで『あめんぼ』のア行を3回。すぐその場で止まって3回。これを3セット繰り返して」。これはハードだ。高い重心をキープしたいのは山々だが、どのチームも2セット目あたりから、スキップはへろへろ、涙目・眉間に皺で笑顔は引きつり……。疲れて下がっていく重心を保とうとしても後半はせいぜい普通の重心になっていたりして。

低い重心は静止で。直立不動で重心を下げるのはなかなか難しい。片足に体重をかけるか、座ってしまえば重心はわりと下がりやすいのだが。「膝くらいに重心を持っていくように意識して」。本人は下げているつもりでも、見ているパートナーからは、「腰くらいまでしか下りてないような気がする」などといった意見がこちらで聞こえる。

『あめんぼのうた』を使った会話。**高い重心**と**低い重心**以外を使ってはいけない。相手の重心と同じ重心になってセリフをつなぐか、まったく逆で出るか。「聞いている間の重心はどうすればいいんですか？」との質問に、「中身のない言葉の会話だけど、相手がいれば聞いている間に少しは感情が動くだろうが、途中の重心移動はいらぬ。自分がセリフを言う直前まで前の状態をキープして」と古城。

わかったようなわからないような感じだがとりあえずやってみる。出来ているような、出来ていないような。二つしか重心がないということが、なかなか難しいのはよくわかった。みんな手探りで会話を続ける。

———休憩 15 分———

三人共同体

■ 『外郎売』の台詞を使っての三人共同体

三人は一人である。長い売り文句を、三人でランダムに引き継ぎながら一人で喋っているように流暢に、かつ、目の前の観客を楽しませながら台詞をつなぐ。まずは劇団員が手本となる。奥村・関谷・山下で。椅子に座ったまま。その場に立つまではOK。(劇団での基礎稽古ではフリーで動き回ることが多い)。……手本にもナリヤしない……。久しぶりすぎて、三人とも相手の出方を探りすぎ、流暢なんてほど遠い。硬い！顔が強張っているのがわかる。あ～恥ずかしい！すごすごと逃げ帰り、受講生のみなさんにやっていただく。むごい！共同体は難しいんだから！

男性三人組で。「韓流スターのようにスタートしてみて」「聞けてる？合わそうとはしてるけど体が全然違う！」「君にいくとまともになっちゃうでしょ？わかる？ちゃんと気が狂って！」古城のダメ出しがバンバン飛ぶ。気が狂えと言われてもねえ？(笑)

軽～く二組くらいやったところで時間切れ。古城から一言。「相手の台詞を聞いている時に同じ身体にするんです。それは、体の内面が変わってくるということですから。自分が喋っていなくても、体の状態は合わせておく。そうすれば、相手の台詞の時に動いていた体のまま、自分の台詞が言える」

“喋る身体・聞く身体”のほんの糸口でしたが、いかがだったかな？全身のクールダウンを少しだけやって、本日はこれにて終了です。お疲れ様でした。

〈二日目〉

二日目のこの日は、古城と関谷が稽古のため夕方入り。おまけに越智が高熱を出して急きょ欠席。というわけで、奥村・山下のコンビで二日目昼の部を預かる次第となりました。不安だ。

体・発

劇団で20年近く続いている「体・発」は、体操と発声の略称である。音楽に合わせて体の各部のストレッチを行う。発声は“体の動きを伴った声出し”をする。

まずは一通り簡単に説明をした後、音楽に合わせて早速やってもらう。順番や細かいやり方は劇団独自のものもあるが、もとはオーソドックスなストレッチなので、多少強引かとも思うが見よう見まねでついてきてもらう。体の曲げ伸ばしやフロアストレッチ、アイソレーション（首・胸・腰などを部位別に動かす）を一通りやっても正味20分程度。劇団では筋トレなども加えて行う。

続いて発声。

■足つき呼吸 (1×1・1×2・1×4・1×8、1×1・2×1・4×1・8×1)

■コケキケカ

昨日の**脱力ジャンプ**や**一行交替発声**に加えて「**足つき呼吸**」や「**コケキケカ**」を。「足つき呼吸」は、足を蹴り上げながら呼吸をする。蹴り上げた足は一発で形を決めて、片足立ちの状態はふらつかないように。蹴り上げた瞬間に息を吸う。降ろしながら息を吐く。吐く息・吸う息のカウントが2拍・4拍・8拍と伸びていく。

「コケキケカ」は手で床にボールをたたきつけるように肘から勢いよく振り下ろす。足もそれに伴って行進。アタックを強く。腹式を意識して。前後に歩く。「コ！ケ！キ！ケ！カ！ソセシセサ、トテチテタ……」

あとは昨日やった「**一音連続**」や、「**一音反復**」などを難易度を高くして。この発声は、ゲーム性が強いので、慣れてくると面白い。人数や相手によって難しくなる。スピードを追求するのも楽しい。

———休憩 15分———

ムーブメント

さてさて……今日は、ひとつ課題がありまして。わが劇団が誇る“**ムーブメント**”を、ぜひ体験していただくじゃないかと。この、私たちが“**ムーブメント**”と呼んでいるものは、パントマイムのような、ダンスのような、お客様の中には「いつもの変な動き」と仰っている方もいて(笑)、何とも説明が難しいのですが……。

その昔、『パラサイト パラダイス』という芝居のオープニングにこの動きを取り入れまして結構評判が良かったので、そこから徐々に進化を遂げ、今の形になったというような次第であります。基本はスローモーションとストップを繰り返します。私たちが“**パラパラムーブ**”と呼んでいる元祖の動きは、作品中のキャラクターたちが日常生活の一コマを**ストップモーション**と**スローモーション**で次々に切り替えて、それを全員同時にやると

いう……わかりますか？リズムに合わせて、8カウントとか、16カウントなどと区切って、なるべく大きな変化（体の向きを変える、表情を大きく変える、姿勢の高さを変えるなど）を、一瞬で起こす。それを繰り返します。近年では、**超スローモーション**とか、**0秒チェンジ**とか、12カウントスロー・4ストップ・8カウント超スロー・ビュン！なんて、もういろんな動きがミックスされてわけのわからないことになっておりますが、基本は元祖“パラパラムーブ”。本日はそのムーブメントを、さわりだけでも体験していただこうと目論んでいるのでした。

- 足の踏みかえ（体の軸を回す）
- スローモーション**の歩行（4カウントで一步・8カウントで一步・16カウントで一步）
- スローモーションと**ストップモーション**
- スローモーションにアクセントをつけてみる

まずはポーズからポーズへの移動。左を向いていたら正面や右へ、高い姿勢なら低い姿勢へと一瞬で**ポーズチェンジ**をする。この時肝心なのは、足を踏みかえることである。両足をベタッと地面につけたまま体だけ回したりひねったりしても大きな変化には見えない。膝を使って、両足を素早く踏んで**体の軸**ごと向きを変える。

「ま、訓練なんで、一朝一夕にどうなるものでもないんですが、一応音楽で4カウントずつやってみましょう」。奥村の掛け声とともに曲が流れ始め、みんなでいろいろなポーズチェンジ

を試してみる。**ストップ**から**ストップ**へ。4カウントごとにポーズを変える。各々が好きに動く。

「もっと、いろいろなポーズで。手も付けてみて」「鏡を見て。体の向きを変えてみて」「イメージは一瞬で絵が変わるみたいな。動いている瞬間が見えないように」。次々に飛ぶ無責任な注文に、みんな必死になって答えようとしてくれている。やったことがないことなので、かえって怖がらずに変化に富んだポーズがいろいろ出てきて面白い。なかなかイイ感じ。

次に**スローモーション**。とりあえず、好きに動いてもらう。と、ここで重大な事実を奥村が発見。「みなさん、このテンポで、4拍一步で歩いてください」。ムムム！そうか！スローモーションのスロー度合いが個人個人で全く違うのだ。劇団員同士だとスローモーションの時の体のテンポというものもなんとなく共通の認識があるが……なるほど。

8カウントで一步、4カウントで一步とランダムに速度を変える。だんだんみなさんの歩く速度が合ってきた。不思議な雰囲気。水槽の中を覗いているよう……。よし！スローモーションとストップモーションを交互にやってみよう！16カ



ウント・スローモーションと、8カウント・ストップの繰り返し。好きな動きで、好きなポーズで。何回かやってみる。……お？ツワモノ現る。なんとストップのポーズが片足立ちである。す……すごい選択！片足で止まってやろうなんぞ、私は今まで一度も思ったこともなかったぞ。両足だっとうまういかないのに！やっぱ、怖がらないって、面白いなあ！なんて感心したら奥村様よりすかさず注意が飛ぶ。「体が揺れたり、二段階にな



っている人がいますが、それはアカンということになります！」「重心を動かすのは時間がかかるので、手足の末節で大きくポーズを変えたように見せるテクニックが必要です」「いかに、早く大きく動いているように見せるかが重要なんです！」。大変だ……。劇団のムーブの訓練と変わらなくなってきた。このあと5分以上、奥村大先生のありがたいお話が続き、なんと「では、古城はやれと言ってなかったけど、“ビク”を入れます」。ビ、ビクだと～！？一同キョトン。“ビク”というのは、ストップの解除——スローモーションの頭にアクセントをつ

けることで、すござっくり言うと、ロボットダンスで動き出しや止まる時に、ちょっとわざとらしくくらいアクセントがつくでしょ？あんな感じ。アレではないけど。奥村先生が見本を見せて、とりあえずみなさんにもやっていただく。……やっぱり難しいみたいよ、奥村先生……。時間も無いし……。サラリーマンムーブやるんじゃないの？

私の心の声が聞こえたのか、それとも気づかぬうちに声を出してしまっていたのか、私の思いは大先生にしっかり通じたようである。

「はい、難しいことをいろいろ言ってしまいましたが、大事な課題がありました！今までの事を踏まえて、みなさんにはこれから“サラリーマンムーブ”というのをやっていただきます。やっと本題に入れた！ブラボー！！

“サラリーマンムーブ”というのは、『パラサイト パラダイス』の中の、もう一つのムーブメント。仕組みはオープニングのムーブと同様。オープニングムーブは登場人物ごとに全く違う動きを同時にやったが、“サラリーマンムーブ”は、右記のように動きの種類・順番は決まっています、同じ動きの中で、朝起きてから眠るまでのサラリーマンの一日を、男たちだけで表現した。

■サラリーマンムーブ

歯を磨く/トイレで用を足す/朝食/靴を履きながら時計を見る/電車のつり革に掴る/出勤の挨拶/パソコンを打つ/新聞を読む/昼食/同僚と無駄話/上司に謝る/トイレで用を足す/飲んでくたを巻く/帰りの電車/帰宅の挨拶/ネクタイを緩める

さて、受講生のみなさんには、この中から三つを多数決で選んでもらった。みなさんが奥村の見本を見て、「やってみたい」もしくは「これならできそう」と選んだのは……

●靴を履きながら時計を見る ●電車のつり革に掴る ●上司に謝る

であった。ええ～？……ま、いっか。やってもらおう……。嫌な予感的中。「上司に謝る」はまだしも、「靴を履く」は片足になる瞬間がある上に時計まで見なくてはならず、安定感はゼロの動き。みんなグラグラ。靴履いてんだか、倒れそうなのを堪えてるだけなのか……スローモーションはどっかいつちゃってるし(笑)。次

のポーズ「つり革」もまた難易度がめちゃくちゃ高い。固定点というヤツが必要で、つり革に掛りながら電車で揺られている体は、つり革を固定点にして、捕まっている手だけは動かさない。手まで動いてしまうとつり革自体が消え、電車に見えなくなり……と、大変に難しいのだ。そして「謝る」へと続くわけだが、「つり革」に掛って揺れているだけの体が「謝る」動作に移っても、こりゃまた変化に乏しくて面白くない。というわけで、「つり革」と「謝る」の間に「昼食」を挟んで4ポーズに。「靴を履く」はブーツでもなんでもいいからしっかりイメージしてもらって、あとは遅刻しそうで焦ってる表情を作ること。「つり革」も固定点より、眠いのか、満員なのか、ウキウキしながらの出社なのかを大切に……と、しっかりしたイメージを持って気持ちを大事にすれば楽しく前向きな気持ちで練習できますね！みたいな方向へ。曲をかけて、スローとストップを繰り返して練習する。焦っている顔やそばをすすって美味しそうな表情がつくと、やはりさっきとは全然違う。急にイキイキして、それぞれが飛び出して見える。気持ちは大事。

本日は、体発からこのムーブメントまで、ずーっと身体を動かし通し。本当によく頑張っついて来てくださる。ほんのさわりを体験してもらおうなんて言って、こんなにやかましく「止まってない」だの「軸を回せ」だのと、こまごま指摘をされても鏡を見ながらストップとスローをひたすら繰り返すみんなに涙が出そう！休憩にする前にちょっとだけ聞いてみた。「疲れてるでしょ？もう嫌でしょ？」「楽しいです！」との明るい返事。どうもありがとう！よし、ムーブ完成。ってことで……いいよね？

———休憩 15分———

重心

昨日のおさらいである。昨日は『あめんぼのうた』を使って、**高い重心**とのみで会話をした。本日は戯曲を使う。テキストは一跡二跳時代の『流れる庭—あるいは方舟—』と、ワンツーワークスの『ジレンマ・ジレンマ』

『あめんぼのうた』と違い、戯曲には台詞に具体的な内容がある。高い重心と低い重心のみでの会話というのが果たしてできるのか？相手の台詞を聞いている間におのずと上がったり下がったりするであろう重心を、キープし続けていられるものだろうか？

『流れる庭』は男性と女性の会話、『ジレンマ・ジレンマ』は女性同士の会話。重心の高い・低い好きに選んでスタート。相手の台詞の間も、自分の台詞が言い終わった時の状態のままの重心を保ち続ける。次に自分が台詞を喋り始める瞬間に、一気に重心を変える。もしくはより高い重心に。より低い重心に。

二人ずつ出てきてやってもらおうが、ものすごく難しい。やり取りしていくうちに相手の台詞の内容によって、重心（感情）は勝手に動いていく。例えば低い重心から初めても、イライラしたり可笑しく思ったりするうちに重心は自然と上がり、ちょっとでも疑問に思ったり興味を失うなんて感情が入ると今度はズルズルと下がり始める。結局は自分のやりやすい普通の重心に戻り、ごく平凡なつまらない会話がダラダラと続いてゆく……となる。

一組だけ、バカみたいに高い重心から始まって、台詞の内容に左右されずにキープし続けながらも平気で一気に低い重心にも下げられるコンビがあり、本人たちはただ一生懸命に「高い高い高い！低い低い……高い！

低い……」とだけ意識して相手に台詞をぶつけていたのだろうが、はたから見ているとかなり滑稽で面白く、古城が言わんとしていることに近づきつつあるような気がしてきた。

何組も何組もやって、そのたびに、「何をどうすればこの稽古は面白くなるのか?」「どこに向かって行けばいいのか?」などと、ディスカッションともつかぬ話をした。迷いそうになるとそのコンビに出てきてやってもらって、「何だかわからんが、面白い!」と言い、何で面白いのかをまた分析し……そのうちに、ギャラリーから笑いが起こるコンビもちらほら出てくるようになった。

結局、無理やりでも機械的にでもいいから、極端に大きく“重心ごと”感情を上げ下げしていくことによって生まれる、この滑稽なやり取りの方が、平凡に台詞を解釈して振り幅の小さい会話をするよりもよっぽどドラマティックで、はるかに見ている者の想像力を刺激することができるのだ!……てなことじゃなかろうか?という結論に行きつき、この訓練は、自分の枠を超えるという意味でも大いに効果があるという発見もして、私たちはみんな爽やかな気持ちになった。たぶん。得体のしれない達成感もあるし、動き続けた体もガタピシ言ってるし、腹も減ったし……待望の晩御飯休憩となりました。

『流れる庭—あるいは方舟—』より

鶴見 県民テレビの鶴見です。

野坂 記者?

鶴見 はい。去年、入社して、今年から現場を回ってます。

野坂 あ、なるほど。ここの記者クラブは初めて?

鶴見 2回目です。このあいだ来たときは誰もいなかったんで。

野坂 特にルールなんてないから。ここじゃみんな好き勝手にやってるから。

鶴見 わかりました。

野坂 いやあ。凄いな外。こんなに濡れるとき、もうどうでもいいやって気になるよね。(テレビを見て) これ、お宅の局だよな?

鶴見 そうですね。

野坂 なんで音、消してんの?

鶴見 嫌いなんです、そいつ。沢井壮太郎。

野坂 なんで?お宅の看板キャスターでしょ?声が嫌いなの?

鶴見 顔も嫌いです。取ってつけたような作り笑顔、気持ち悪いです。

野坂 へー。

鶴見 聞いていいですか?

野坂 あ、何?

鶴見 あたしってブスじゃないですか。

野坂 ……………。

鶴見 あたしってブスじゃないですか?

野坂 あ、いや、うん……。

——休憩50分——

お菓子を持ち寄ったり、お互いの出身地や所属団体を聞いたり、一人が好きな人は外に食事に行ったりと、思い思いに食事を含む大休憩をしたあとは、古城と関谷も加わり、本日の最終ブロックがスタートしました。



昨日の三人共同体の写真です。三人は一人。一つの台詞を流暢に引き継ぎながら、時に笑い、時に泣き、怯え、怒り……手を変え品を変えて目の前のお客さんの興味を引き続けながらも「ういろう」という菓子の効能をアピールし続けなければならない。

戯曲を使った重心の変化

男性二人、女性二人の名が呼ばれ、前に出る。**二人共同体**。**三人共同体**が「三人は一人」であるのと同様、二人共同体は「二人は一人」である。テキストは『流れる庭—あるいは方舟—』。新聞記者の野坂を男性二人で演じ、地元テレビ局の鶴見を女性二人で演じる。

まずは昨日までやっていた、「相手の台詞の間は直前までの自分の重心をキープして、自分の台詞になったら一瞬で重心を変化させる」というルールで。

共同体が加わって、自分だけの思惑通りにはいかないところが余計に難しい。頑張っても重心を高いと

ころでキープし続けて、いざ重心を落として低いところから出てやろうなんて思っても、パートナーである、もう一人の野坂あるいは鶴見が自分より一足早く、より高い重心で台詞を言い出してしまったら、慌てて自分も高いところに持っていかなくてはならない。台詞は一つの台詞ごとに二人が交互に入れ替わる。順番に四人が会話をするわけである。

- 高い重心と低い重心のみでの会話/『流れる庭』を使っの二人共同体
- 立ち稽古/『ジレンマ・ジレンマ』を使っの1対1の会話

気を付けなければいけない点が多すぎる。まずは重心。難しいのがそのキープ。相手役の台詞を聞きながら重心をキープし続ける。頭の中では次の自分の台詞に適した重心を探る。その一方で横にいる自分の分身であ

るパートナーにアンテナを張って、パートナーの声や体の変化には常に合わせていく。

「機械的にやらないで。会話なんだから、重心の高低に理由を見つけて。高い重心の中でも、相手に文句を言う、独り言っぽく言う……色々あるでしょ？ちゃんと理由をつけて」

全て同時にやらなければならないので、一つに集中すると他がお留守になる。横のパートナーの事ばかりに気を取られると重心は普通の状態になっていき、重心にかまけていると共同体にならずという具合。一番疎かになるのが基本中の基本……「どんな状態でも台詞はすべて前に出して！相手に届けなければダメです」。一日ぶりの古城からのダメ出し。緊張感がグーンと増す。

「今度は、相手の台詞の間に重心の上げ下げをしていいです」

やった！これは随分とやりやすいだろう。

「だけど重心は、極端に高いか極端に低いかしありません。中途半端はいらない」

だ……だろうね。しかし、直前までキープしていなければならないというのは、要するに相手の台詞を聞いてはいるが、動く感情を抑え続けなければならないということなのだから、相手の台詞の間に重心を動かしていいという方が絶対的にやりやすいはずだ。が、受講生のみなさんは「極端に」というのが苦手らしく、「今どっち？」「今のは？」のストップが古城からどンドンかかる。「下……でした」「違います。半分より上ですよ今のは。体、上がってますよ。下げるならドーンと腹据えないと」「(キッパリと) 上です！」「微妙に上でしょ？極端に上にいって下さい」。悪戦苦闘しながらも何組かチャレンジを繰り返す。

「自分の台詞の直前に重心を上げ下げするのと、相手の台詞の間に重心を上げ下げするのとでは、何か違いがありましたか？」という古城の質問に、「相手の台詞のうちに上げ下げする方がやりやすいです。上げよう下げようと考えずに、相手を見ていくうちに自然と上がったたり下がったりしていくので」「中途半端な気持ちで言い出すことが出来ないから難しいんだけど、自分の台詞の言い出しがクリアで、やっていて気持ちがいい」などの感想。

「相手の台詞が長い場合、重心が上がっていたけど途中で下がり始めていくような時がうまくいかない。聞いているうちに感情が変わっていくので、トップからトップにいかないうちに自分の番が来ちゃって……となって困った」という意見には、「長い台詞は重心が移り変わっていいです。普通は聞いているうちに感情は動くんです。だけど、それをゆっくりやっていると、ものすごく中途半端なところから台詞を言い始めたりするんですよ。だから、一回はしっかり上げてごらん。一回はしっかり下げてごらんと。そうしたら、自分はフットワークが遅いとか、貰えるところで貰って上げ下げしていないとかというのが、分かりやすくなるんじゃないかと思ってるんですけど。聞いているうちに下がり始めたけど、途中で『なんだ？コイツ』と思って重心が上がりかけた時に自分の番が来たら、そこをグッと上げてから言え！ということ。日常の会話ではもちろん、途中の感情のまま話し出すことはたくさんあるんですよ。それでいいんだけど、今は、幅を探れと言っているんです。ま……難しいでしょうが、理屈はわかりますよね」

奥村 「昼はそこら辺で闇に入ったんだよ～。どこをどう解釈すればいいのかを、みんなで一緒に考えた」

古城 「あ、そうなの？」

一同 (笑)

共同体については、「なかなか合わせられなかったけど、パートナーの体の状態に頑張っについていこうとはした」という意見が多数。「それでいいんです。自分がこう出ようと思ったのにパートナーは全然逆だったなんてことがあってもすぐに合わせられるか？ということ。フットワークを大きく早くという訓練ですから」

———休憩 15分———

立ち稽古

長机を出して、『ジレンマ・ジレンマ』に移る。

古城からは「今やったようなことを、活かせるなら活かしてください。普通の立ち稽古のつもりで」と。

このシーンは、産地偽装して米を販売している米屋の女と、それを取り調べている調査員の女の会話。調査員は偽装販売を確信しながら取り調べを進めるが、米屋の方はなにがなんでもしらばっくれなければならない……という場面になっている。

まずは、米屋/関谷、調査員/山下の劇団員チームで。

私は全くの初見なので滅茶苦茶楽しい。なあ～んにも考えずに会話終了。「どうでしたか？」の古城の問いに「後半、ちょっと遅くなってしまったなあと感じました」と二人。古城曰く「いつもよりは全然、重心の上げ下げははっきりしていた。その中で、遅い会話が続いていると感じた時に、それをバンッ！と断ち切ってテンポを変えようとか、意図的に出来るようにならないとダメですね」。二人「なるほど」と納得したところで、受講生のみなさんにバトンタッチ。

「昨日、今日で何かは身に付いているだろうくらいの気持ちでやって下さい。相手から受ける感情、自分の思いの方を重視して」

普通の芝居でやっていいとなると、如実に癖が出始める。台詞の頭に必ず間を取る人。綺麗に台詞を言おうとする人など。第一に、テンポが遅くなる。テンポが遅くなると自分に返す時間が長くなり、聞くことが疎かになる。相手の台詞や表情の中にある、重心・感情の上げ下げのきっかけをことごとく逃しているのがわかる。事前にテキストとして渡してあったので、読み込んできている人も多いのだろう。自分の考えたプランが最優先。

「基本的に会話のテンポは速くして。余計なプランを入れる隙間はいらぬ。女と女の戦いだからね！隙あらば崩してやろうくらいの気持ちで挑まないと。よく聞いて、狙って！」

なかなかうまくいかず。俳優が自分のプランを捨てていくのは困難なのだなあと。オーソドックスな台本の読み解き方……悪く言うと、ステレオタイプな解釈に疑問を持たない人が多くて、そんな事より、相手から刺激を貰っていく方がいくらでも多方向な台詞回しが出来て楽しいのになあと思ったよ。私は。

最後、男性二人にもやってもらって、全体がより一層ションボリしたところで、この二日間のワークショップはピリオドを打ちました。学校の演劇部なんかには女が多いのも頷ける。女の方が喋り好きで、感情も単純に拡大しやすい生き物なんだわ。男性は言葉が重い分、貫録や深みのある演技が素敵だが……その味が出せるようになるまでは、女子供以上にキャッキヤやっとかないと勝負出来んゾ。男性諸君、頑張ってくれたまえ！

本日も軽くクールダウンのストレッチをして、終了でございます。この後、交流会と称したただの飲み会へ一気になだれ込んだのは言うまでもありません。

以上、本当にお疲れ様でした！今後の皆様の何かのお役に立てれば嬉しいです。

レポート後記

頑張ってためました！パソコンがチンパンカンパンなので読み辛かったりしたらごめんなさい。

このへっぽこレポートを読んで参加者が増えてくれたら泣いて喜んじゃうわ……!(^^)!

以上、記録/山下夕佳でした。